

2015年12月6日

陸前高田市を訪れて

2010年卒業 山田幸子

立命館大学から東北震災応援ボランティアの募集があった。もうすぐ5年が経とうとしている震災だが、最初震災時のテレビ放映を見たとき、そのあまりの状況に、遠い近畿圏に居るにもかかわらず、その津波の下におこっていることを想像すると、震えが止まらなかったことが思い出された。限られた情報の中で、「確認できないが200から300の浮遊物が見える」「周りは津波で流され、今家の屋根瓦の上に居るが、あたりはシーンと静まり返り、空を見上げれば、何もなかったように星々が煌々と光っている」と個人からの情報が耳にとまり、圧倒的な自然の前に、畏敬の思いが起こったのが思い出された。

あれからいったい私は何をしただろうか。遠いかの地の情報に耳を傾けることはあっても、そのあまりの遠さ、縁のなさに、訪れることはなかった。

あの震災を、この目、この耳で感じておかなければという思いや何か私にできることはないだろうかという思いはあったのだが、日常に流され、いつの間にかその思いは薄れていったのである。

しかしボランティア募集を聞き、たぶん、今私ができることは、何もないだろうとは思いつつ11月21日から11月22日岩手県コースに参加したのである。

盛岡駅に集合し、バスで海岸線に出て、三陸鉄道でリアス式の海岸線を巡ったのであるが美しい海岸線が続くのみであった。夜、陸前高田市の山の中腹にあるホテルに落ち着き、交換会に出ると3人の大学OBの被災者の方の講演があった。酒造会社の方の講演で、震災の真ただ中するとき、「自分では普通に対応しているつもりだったが、ある鮮やかな色のケーキを見たとき、初めて自分の見ていた世界が震災の後、白黒の色のない世界を生きていたと分かった。』というエピソードとともに大変な事態を乗り越えられた話や教育委員会としての立場での奮闘ぶりとそのあと、自分の健康・命の問題としてこれ以上働けないと早期退職せざるを得ない状況があったという切実な話を聞き、また公務員としての震災時の大変な状況の話をしていただいた。

翌朝ホテルからはるか遠くに海が見え、その海からホテルまでずうっと何もなく、一面の雑草が生い茂っていた。聞けばそこは震災前、陸前高田市街地ということで、町全体がすっぽり流されたということであった。そこにあった様々な生活と人々を思い、茫然としてしまった。

その後、中尊寺の金色堂や遠野伝承園に案内され、生粋の観光客となっていたのである。最初の目泊まった盛岡市内のホテルや大きなビルや町並みは震災に無縁の東北の都市の日常があった。その温度差、落差が被災地の人々を2重に苦しめるのだろうと想像した。

それでも、笑顔で「私たち観光に来て、知ってもらふこと、忘れないで居てくれること、お土産を買ってもらい地元の産業に寄与してもらふことがありがたい」といわれる、その人としての強さに頭の下がる思いであった。